

第3回子ども計画（第2期）後期計画検討部会での主な意見

平成30年12月7日（金）9:30～11:30 於：区議会大会議室

（2）子ども計画（第2期）後期計画の基本的考え方について

「本人を主体としたつながり」が大切だと思っています。新しいつながりをつくっていくということは社会福祉がもともと持っていた働きで、そこから人権や一人ひとりのことを大切にすることが出てきました。今の時代を見ても、適応を強いられるようなつながりや多様性が大事にされているというところから、やはり主体ということが大切だと思います。

いろいろな保育園に行って、保護者のつながりやクレマーの話を聞いたり、子どもの主体性について見ていく中で、「共生」という言葉がよいのではないかと思いました。共生というのは、例えば多様性の尊重や、多様な経験、多世代交流であったり、「ダイバーシティ」の意味での共生でもありますし、保育園で言えば、「子どもも親も職員も幸せになれる」ように、みんなで共に生きていく仲間というような意味合いの共生でもありますので、よいのではないかと思っています。

今何が足りないかと考えた時に、私は子どもや親に「情報」が足りていないと思います。海外を見ると、保育園を利用する親はどんな態度で保育園と関わるべきかが、ハンドブック等に記載されています。困った時はこうしたらよいとか、お友達と仲良くしておいた方が助かるとか、そういった基礎的な情報が共有されていないように思います。

本当は遊び場が近くにあるのに、知らなかったために利用できていなかったということもありました。例えば、品川区では保護者同士で情報をアップして共有する取り組みもあるそうなので、そのあたりの検討も必要なのではないかと思いました。

海外では、これはやってはいけないこと、これはやらなければいけないことというようなルールがきちんとしている事業に対して、助成金が出されています。私は「行政は思想的な骨格を示すべきだ」と考えていますので、もっと打ち出していった方がよいと思っています。

例えば、昨日あった話し合いで、保育ネットの次年度の活動として、保育のガイドラインをもう一度見てみようということになりました。保育はこうあるべきであるというのを親も保育士も市民も一緒になって、ひとつの文化として共有しておかなければなりません。子どもの権利を具体化していく時には、ここは守らなければならないということをやっつけていかなければならないと思っています。そうしなければ、子ども達が地域で生きていく時に方向性が見えなくなってしまうます。

同じく昨日思ったことですが、これだけサービスがあるのに、なぜ問題解決に至らないのかということをしっかりと考えてみる必要があります。なぜ虐待は減らないのか。人材もサービスもつくり出しているのに減らないのは、やっていることが違うのではないかと、少なくともこの地域ではこうしたい、うちの保育園ではこうしたいというのをもっと提案した方がよいと思います。例えば、子ども家庭支援センターでは100件を超える相談件数を持っていますが、その100件はきちんとしたケアにつなげることができているのか、ケアの前の予防はできているのでしょうか。私たちは保育の拡充を行ってきましたが、最も大切な子どもの命というものを大事にするという社会を作り出せたのでしょうか。ここも考えていかなければならないと思っています。世田谷区が保育園の民営化を進めた際に、民営化によってお金と職員をつくり出し、その職員がもっと必要となるところに着手していくという思想がありました。既に効果的な結果が出てきている自治体では、公立の保育士を訪問型に徹底させて、相談だけでなく、具体的な支援の場に連れ出すような積極的なアウトリーチを実施しています。

今子育て家庭が抱えている問題は、保育ニーズとして顕在化しているものもありますが、埋もれてしまっているものもたくさんあります。例えば、虐待の件数であったり、子ども家庭支援センターでわかっている支援が必要な子どもや家庭の数などがあります。ただ児童相談所の拡充をすればよいと思われがちですが、児童相談所は相談救済の最終機関として置いているもので、子ども、子育て家庭を豊かにするためには、地域支援を手厚くする必要があり、今の状態では決して児童相談所が有効に機能するようになっていないと思います。

待機児童が多いこと、保育時間が短いことへの対応はもちろん必要ですが、もっと先を見据えた施策を打っていく必要があります。利用者が減っているのであれば、児童館やBOPを抜本的に見直してもよいのではないのでしょうか。このような考え方が「当事者主体」ということだと思います。今は行政主体になっています。サービスがいくらあってもつながらなければ、それは必要ないものなのかもしれないし、つなぐシステムがないことが原因であれば、それを変えなければなりません。

キーワードという視点から考えると、「子どもの気持ち」や「子どもの願い」に気がつけるかどうかが大切だと思っています。保育園では、保育士が子どもの考えや気持ちを代弁してくれますが、子どもから見たものの言い方、ものの見え方について、もっと語り合われたり、専門機関が発信していったりというのが、もっと地域や社会の中で広がっていく必要があると思います。日常のわが子の姿について保育士から聞くことで、親自身も学び、子育て力をつけていくというところがあると思いますが、そういう語り合いがまだまだ少ないように思います。「子どもの立場からの価値観」みたいなものを押し広げるような機会や働きかけをもっと増やすとよいと思いました。

私は、直接的に子ども達と触れ合うのは職員ということで、**職員の育成や確保**が非常に大切だと考えています。今度、新たな学童ができて多くの職員が入るのですが、非常勤の方が多い場合に一致した見方でやっていこうとすると、バラつきが出て、職員に負荷がかかってきます。継続してやっていくということを考えると、職員を大事にしながら働いてもらい、育てていくという視点が必要になります。

先日、保育園最初の一步という保育のごあんないを読む会を開催したところ、とても人気で、初めて手引きを目にした方や、今までなかなか読むことができていなかった方々にお集まりいただきました。参加者を見ていると、情報を知っている方と知らない方で格差がはっきりしてきていると感じました。情報を知っている方はいろいろなサービスを上手に取り込んで自分なりにやっていけています。**情報があることが当たり前ではないということ**を私たちは**知っておかないといけない**と思います。

予防についてはもう少し研究した方がよいと思っています。世田谷区は「**予防型**」と長く言ってきているので、**そろそろ打ち出してもよいのではないか**と思っています。関わってもよいと言ってくれる地域の方々も増えてきていますが、個人情報の問題や、当事者や地域の人が参画する際のネックになる部分もありますので、そのあたりの障壁になっているところを剥いていって、信頼関係をつくって、開いて守っていくということを次の5年間でやっていきたいと思っています。ネウボラが始まったり、子育て世代包括支援センターが見えてきていますので、どこまで地域と一緒にやっていけるかだと思います。

ヒア・バイ・ライトというイギリスの政策がありますが、「**子どもからきちんと声を聞く**」ということが、そろそろ具体的な形になるとよいと思っています。**子どもには「聞かれる権利」があり、周りの大人は聞く力を持つ必要があります。**子どもへの支援について、丁寧にやっていくためにはどうすればよいかと考えた時に、児童館や図書館など、既にあるものの見直しやバージョンアップで対応できることがあると思います。いずれにしても、質の向上が重要で、世田谷区はこうやっていくということが打ち出せるとよいのではないのでしょうか。

「共生」というお話がありましたが、「**共同養育**」という言葉に尽きるかと思っています。母親の共同養育を意識的にやっていかないと、手をつなぎ合えるような関わりが薄くなってしまいます。また、父親の共同養育がとても必要となってきています。自分の子どもだけでなく、他の子どもにも関心を持って一緒に育て合っていけるような機会や場を増やし、**となりの子育てを気にかける人を増やす**といったことがよいと思います。

さきほど、子どもの視点という話がありましたが、最近学生と接していると、相手はなにを自分に求めているのか、なにを言うと正解なのかを探って話す傾向が強まっていると感じています。その人自身が経験の中でどんなことを感じたとか考えたということを引き出すまでに壁がいくつもあるような感じがしていて、今までそういった中で生きてきたのではないかと感じています。子ども達が自分が感じている気持ちや考えを自由に表現できるというようなことが、これから大事になるのではないかと思います。

乳幼児期の頃ですと、小児科の先生とも関わりがありますが、そこと子育て支援があまりつながっていないように思います。さきほど、個人情報の話がありましたが、みんなバラバラに持っている情報をつなげることができると、その人の全体像が見えてきて、問題点がわかるのではないかと思います。教育や福祉や医療をうまくつなげるようなことを考えた方がよいのではないのでしょうか。

継続性という言葉が出ていましたが、今つながっていることに目が向きがちですが、長期的につながっていることもすごく重要だと思います。先日、中学生になる子どもの保育園の頃のお友達と会ったのですが、子ども達にとっても親にとっても心強いことだと思います。長期的な関係ができるような仕掛けも必要かと思っています。

キーワードの中に「居場所」という単語が入っていません。居場所とはなにかと言うと、サービスとサービスをつないでいくステップのような中間的な場だと思います。その場には、つなぐ「人」が必要になります。例えば、4ヶ月の赤ちゃん訪問では、保健師が行くだけではもうダメだということが言われています。相談できないと言われた際にそこからどこにつなぐのか、どう対応するのが重要になります。うまくいっている自治体では、保育士が同行して対応しています。すべての箇所に訪問するからといって、虐待がなくなるということにはなりません。そこにはつなぎ役が必要で、この役目は誰がやるのか、どういう専門性が必要なのか、このようなことを考えていかないとサービスがいくらあってもつながりません。

サービスは、保護から回復まで、重層的でなければなりません。それから、つながらなければならないので、ネットワークが必要です。そして、その人の人生の中での継続性がとても大事になります。世田谷区がどのような形で、地域での伴走者をつくるのか、親に代わる伴走者はどこにいるのか、どこにつくり出すのか、生きていく上での伴走者はきっと必要になります。保育の量的な確保だけでなく、今ある資源、場、人、今まで実践したことや文化などをうまくつなぎ合わせて、コーディネーターが難しい方々や孤立しやすい方々をつないでいくことが大きな課題かと思いました。お話のあった「共生」や「情報」というのは、つなぐ時の方向性や手段であると思います。